

派遣者番号	R3K23	氏名	江袋 勇樹
研究主題 —副主題—	国語科教育を基盤とした「言葉の力」をあらゆる教育活動に生かす指導のあり方の工夫		
派遣先	早稲田大学 教職大学院	担当教官	遠藤 真司
所属	大田区立都南小学校	所属長	川田 国昭

キーワード：言葉の力 言語能力 教科等横断

### 1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

2018年に行われたPISA型国際学習到達度調査では日本の読解力の順位が低下した。読んだことを理解した上で、書いたことを根拠にして、自分の考えを表現する力を育むことが現在の国語科教育の課題の一つになっている。小学校学習指導要領（平成29年3月告示）には、「言語能力の育成を図るため、各学校において必要な言語環境を整えとともに、国語科を要としつつ各教科の特性に応じて、児童の言語活動を充実すること」と記されており、国語科で学んだ言語能力を各教科で充実させることが必要とされている。東京都が掲げる教育課題の中でも「学習指導方法の改善」として、「言語能力の育成」が求められている。

小学校では、コロナ禍によって行事の縮小、お互いの距離を置くことが多くなるなど、児童同士のコミュニケーションの機会が大きく減少している。このような中でも、教員は「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた、一層の授業改善が求められている。

より良い学級集団を形成し、「主体的・対話的で深い学び」を実現させるには、授業時数が最も多い国語科において言語能力を身に付け、自分の意思を適切に相手に伝え、他者のことを正しく理解しようとする力を育てていくことが必要であると考えている。そのため、国語科の単元で学んだ言語能力に汎用性をもち、すべての教科で生かせるようにしていくことが大切だと考えた。そこで研究の目的を、国語科で学んだ言語能力を、他教科でも生かしていくための指導の工夫を見付けることとした。

### 2 研究の方法

#### (1) 先行研究について

遠藤(2019)は「国語科教育を基盤とする学級経営」の有効性を示し、「他者理解の能力を培う言語能力を育む国語科教育と、他者との良好な人間関係を築きあげる学級経営には密接な結びつきがある」と述べている。梶田(2014)は「子供が学校での教育を通じて言葉の力をつけること、それを通じて様々な課題を解決できる力を育てていくこと、これは基本的な重要性を持つ課題」と述べ、「新たに学ぶ力、問題を解決していく力の土台に言葉の力がある」とも述べている。これらの先行研究より、国語科にお

ける言葉の力の育成は、学級経営や授業改善に結び付くということが分かる。

堀(2019)は一枚ポートフォリオ評価(以下、OPPA)による自己評価によるメタ認知能力の育成を図っている。常に問いを持ちながら自己評価による学習改善を行い、学習に必然性をもたせ、学習前と後での変容を自己評価することで、自己を適切に見取り、学習の方向性を判断するとともに価値付けを行う力の育成方法を示している。このOPPAの実践を「言葉の力」の育成に応用し、「言葉の力」とは何かを問いながら、OPPAシートで学習改善を行うことで、国語科における言語能力のメタ認知を図り、あらゆる教育活動に生かせるように指導方法の工夫を行った。

#### (2) 「言葉の力」について

「言葉の力」の定義を小学校学習指導要領(平成29年3月告示)の国語科目標「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」より「正確に理解し適切に表現する資質・能力」と位置付け、育みたい言語能力の目標とした。

#### (3) 研究の対象と調査期間

都内公立小学校6年 (32名)  
令和3年7月下旬から令和4年1月下旬

#### (4) 研究の進め方

以下の表1と図1のもと「言葉の力」を身に付ける指導を行った。

表1 授業計画

7月上旬	国語「『言葉の力』って何だろう」
10月上旬	国語「身についた『言葉の力』を確かめよう」
10月中旬	国語「『鳥獣戯画』を読む」
11月中旬	国語「日本文化を発信しよう」
1月中旬	社会「世界に歩み出した日本」

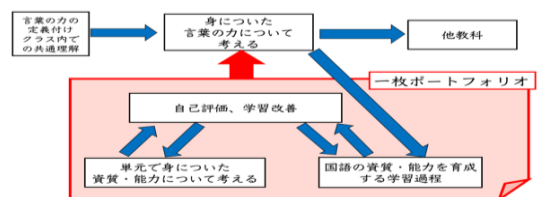


図1 研究構想

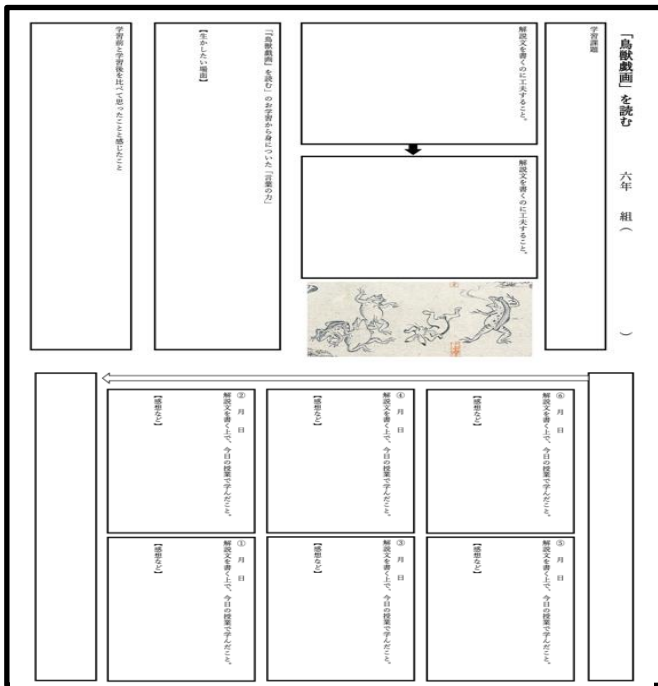


図2 一枚ポートフォリオ(「鳥獣戯画」を読む)

### (5) 検証方法

ア OPPA (図2) を使いながら国語科の単元を進め、単元終了後には身に付いた「言葉の力」についてまとめの時間を作り、記述内容を検証した。

イ 9月上旬と12月上旬に、児童に対して国語科に関する質問紙調査を行い、その回答内容をAIテキストマイニングで比較した。

ウ 国語科の『「鳥獣戯画」を読む』の解説文を書くときに用いたルーブリック評価を、社会科の「世界に歩み出した日本」の風刺画の読み取りで同じルーブリック評価を用い、その差を検証した。

## 3 研究の結果

### (1) 授業後の記述(検証方法ア)

『「鳥獣戯画」を読む』では、「絵を『読む』』というのはどういうことなのか」という問いを常にもって授業を進め、児童は「ただ絵を見るのではなく、絵について『正確に理解』し、その魅力を『適切に表現する』。」など、「正確に理解し、適切に表現する力」「言葉の力」と近い認識をもてるようになった。身に付いた「言葉の力」として、「相手が理解できる言葉で説明する力」「相手に興味をもたせるような話し方や書き方」「〇〇を読む力」「文章以外も読み取る力」「言葉で表しにくいことを言葉にする力」が挙げられた。

「日本文化を発信しよう」は、前単元の『「鳥獣戯画」を読む』で学んだ解説文を書く工夫を実際に使って日本絵画に関する解説文を書くことで、「絵を『読む』」ことに関して更に理解を深め、汎用性を高めた。授業後の振り返りでは、

「深く読み、考え、まとめる力」「考えたことを分かりやすく伝える力」「見て考えたことを言葉に変える力」などが挙げられた。

### (2) AI テキストマイニングで比較(検証方法イ)

9月と12月に「国語科で学んだ力を他教科のどこで生かしているか」と自由記述させたものをAIテキストマイニングでワードクラウド化したものが図3である。

12月には「話し合い」や「対話」という言葉を使って表現する児童が増えた。



図3 AI テキストマイニングでの比較

### (3) 国語科と社会科での活用(検証方法ウ)

社会科において、国語科で学んだ知識をどこまで生かしたかを確認するために、両方の作品について次の共通のルーブリック評価を行った。結果は、国語科と社会科での有意差は認められなかった。国語科で学んだ知識を他教科で活用していることが分かる。しかし、個別に見ると国語科より社会科の点数が低くなる児童も一定数いた。

## 4 研究の考察

国語科で身に付けた言語能力を「言葉の力」として、自己評価を行いながら実際に活用していくことで、身に付けた言語能力を俯瞰的に捉えることができ、振り返りでも文にまとめるなどで身に付けた力を可視化することができた。

AI テキストマイニングの比較から、他教科で話し合いや対話するときに国語科で学んだことを生かしていると考えた児童が増えた。「漢字」という言葉は減ったわけではなく、両方同じように使われていた。その他の特徴的に使われた言葉も大体は同じ割合である中、「話し合い」と「対話」という表現は目立って増えた。これは、「言葉の力」つまり「正確に理解し、適切に表現する力」を意識させ、活用する場面を作ることによって、最終的には「対話」「話し合い」の場面で「言葉の力」が発揮していると認識した児童が多かったからであると考察できる。

## 5 今後の展望

国語科で身に付けた「言葉の力」を他教科でも使い、活用できるように適切な支援を考えていくことが必要である。また、「言葉の力」は、他教科のみではなく学校教育の様々な場面で生かされなくてはならない。今後はさらに広い場面での活用を目指していきたい。